

柳田国男と読者のネットワーク編成

—昭和初期・長野県での『真澄遊覧記』『一茶叢書』の刊行戦略—

Yanagita Kunio and The Creation of Readers' Networks

はじめに

柳田国男の長き探求の過程で、大正から昭和にかけての時期は大きな画期となったという理解は、現在ほぼ共有されたものと言っていい。たとえば永池健二が柳田の具体的著述に即して、こうまとめている。山人¹先住民説との決別を示す「山の人生」の連載が大正十四年、そして周圏論を提示した「蝸牛考」の連載が昭和二年。既成史学との方法的な対決を鮮明に打ち出した「聳入考」の講演が昭和三年と続く。それまでの問題関心からの離別と、新たな方法論の提示とが、こうした対比からくつきりと浮かび上がる。さらにその学は昭和八年から十年前後を境に、新たに日本人の固有信仰の問題に軸足を置くように、今一度大きな旋回を遂げた²と永池はまとめている（永池 一九九六 二五、三九）。

大正から昭和にかけての転回は、問題関心や方法論といった側面に限らない。使用する資料の性格という点からも、押さえうるものだ。民間伝承の重要性を早くから指摘していた柳田ではあるが、その初期段階では文献資料に多く依拠していたことにここで目を留めておきたい。そこ

矢野 敬一
(YANO Keichi)

(平成二十年十月六日受理)

で駆使されていたのは近世の地誌・随筆類であり、中世以降の日記や記録に出てくる記事であった。しかし研究の深化に伴って、文字で記された事項の少なさを痛感した柳田は、その限界を知るに至って現実に存在する事象を資料とする姿勢へと転換したのだと、福田アジオは指摘する³（福田 一九九二 三三五）。

確かに文献資料からの離脱は、その資料的限界に起因するという理解は正しい。ただここでは、そうした転換は一方で当時の活字をも含む多様なメディア状況を勘案しなければ、その意味を十分に把握できないのではないかとこのことを提起したい。ある資料を手にするには、どのようなメディア状況のもとに、いかになされるのか。またその背後にはどのような社会的関係性が埋め込まれているのか。その文脈を丹念におさええていくことが、昭和初期の民俗学の展開を知る上で必要な作業となってくるはずだ。

読書についての調査にあたって、具体的にどのような場所で、どのような人々に、どのような形で情報が広がり、届いていたのかというプロセスの重要性を説くのが和田敦彦だ。読みの場とは多様なネットワーク

の中においてこそ作り出されるものであり、そうしたネットワークを介して新たな情報が作り出されるものとする〔和田 二〇〇二―一六八、一七八〕。むろん、そうした視点は民俗学の学史を振り返る作業でも着手されている。たとえば真鍋昌賢は雑誌メディアを対象にして、民俗学の運動体としての側面を勘案すれば、誌―上での読む経験を超えて連動する誌―外での経験をも射程に入れなければならない、という。民俗学において雑誌とは、そうした多面的な経験を通して学問への認識を構造化していくメディアなのである〔真鍋 二〇〇三―五〕。であるならば、大正から昭和にかけて民俗学的な関心を抱く者が、どのように資料にアクセスしていたのか、またその回路はいかに形成されて知のネットワークが編成されたのかという点の解明は、当時の多面的なメディア経験を解きほぐす作業へとつながっていく。

再び大正から昭和にかけての柳田の転回について、永池は別の論考でその特徴について「共同体外の世界から共同体内への視点の転換」と端的にいう〔永池 一九七五―五五〕。その指摘は益田勝実による「伝説の〈怪奇〉を追うことから、平民生活の〈日常〉を追うことへの転換」〔益田 一九六五―五〇〕という理解を受けたものだ。それは柳田の探求の軌跡からいえば、折しも長野県に足しげく通って、主に教員層を対象として実地調査の指導や講演、地元の雑誌への寄稿を度重ねて自らの学を模索していた時期に重なる。大正五年の長野県諏訪教育会での講演を皮切りに本格化する柳田の関与は、以後『東筑摩郡誌別篇』『諏訪史』『北安曇郡郷土誌稿』などの編纂事業での指導、助言につながり、その営為が昭和初期の「二国民俗学」へと結実していく過程は伊藤純郎の著作に詳しい〔伊藤 二〇〇四〕。

「共同体内への視点の転換」は、言うまでもなくこうした長野県での

様々な調査実践に根差したものである。さらに言えば、柳田が文献資料から採集資料へと、アクセスすべき資料の性格を変えていく過程も、長野県での多様な実践を通してその意味がより明確となってくる。たとえば江戸時代後期の旅行家・随筆家で信濃・越後・出羽・津軽他を旅歩き、後に『菅江真澄遊覧記』と総称された記録文を残した菅江真澄。その長野県内での紀行を活字化するべくリクルートして読者のネットワークの組織化を図った昭和初期の柳田の営みは、調査実践への指導・助言と同時並行でなされていたのである。文献資料から採集資料の重視へと流れ自体、けっして単線的なものであったわけではない。それは柳田のもとで、民間伝承に関心を寄せていた者にしても同様である。本稿ではまず長野県での菅江真澄の紀行文の活字化の経緯について触れ、次いで柳田が主導した炉辺叢書の一冊として『小谷口碑集』を上梓した長野県の教員、小池直太郎とその編纂した『郷土読本』および『一茶叢書』に目を向きたい。そうした微細な軌跡から、改めて当時のメディア状況の中で、読者を組織してネットワーク化を図ろうとした柳田の試みの意義が浮かび上がってこよう。

さらに昭和初期の長野県内で注意したいのは、郷土研究の多様なうねりである。この時期、とりわけ大きな役割を担ったのが地理学の三沢勝衛かつえだ。諏訪中学校の教諭をしながら、精力的に県内の教員を対象に講演、講習を重ねた三沢の活躍は、地理学からの郷土研究の推進役を担うことになる。むろん、郷土史の立場からの郷土研究が占めた位置も大きい。現在も続く雑誌『信濃』の創刊は昭和七年のことだ。

柳田の学の展開は、こうした多様な知の展開との協力／競合関係の中でなされていたわけである。そこでの見取り図の中に柳田を位置づけなおすことによって、本稿での問題意識はより明確に浮かび上がってくる

に違いない。昭和初期の郷土研究をめぐる多様な知のネットワークの中に、柳田の営為を位置づけることがここでの課題だ。その際、メディアとりわけ活字メディアへの関与という視点から論じることには主眼を置く。読者のネットワーク編成という観点は、運動としての民俗学の一面を明らかにする補助線の役割を果たそう。

一 菅江真澄 活字化されざる文字世界への着目

明治から大正にかけての柳田の著述が依拠していたのは、すでに述べたように採集資料ではなく文献資料であった。柳田が大正三年に甲寅叢書第三篇として刊行した『山島民潭集（一）』に引用された地誌、郷土史誌類、随筆、日記、紀行の書名を逐一リストアップしたのが小堀光夫だ。それによれば五百を超える引用資料のうち、多くは内閣文庫所蔵のものであり、中でも一番の引用回数を占めるのが菅江真澄からのものであった（小堀 二〇〇五 一四）。その『真澄遊覧記』のうち、長野県内での紀行の活字化は昭和四年から始まる。ここではその過程を通じて浮かび上がる、民間伝承への関心を軸とする知のネットワークの所在について振り返ることにしたい。

柳田は明治四三年に法制局参事官のまま内閣書記官となり、内閣記録課長に就任する。法制局に移った明治三五年頃から内閣文庫の蔵書に触れていた柳田は、記録課長の任に就いてからより一層書庫に入り浸る機会が増えていく。内閣文庫は幕府資料、和漢古書、近世地方資料では随一の蔵書を誇っていたものの、当時広く一般に公開されてはいなかった。柳田が手にした内閣文庫の蔵書の多くは著者の自筆本か浄写本といった未公開のものばかり。自らの立場を活かして柳田は多くの蔵書を耽読し、その後の学問展開につなげていく。飯澤文夫が述べるように、「官僚体

験」すなわち「読書体験」だったのである（飯澤 二〇〇〇 一九〇）。

飯澤は現在判明している限りの柳田による内閣文庫本の読書歴と、その著作への引用について年表化しており、柳田の学の展開を知るうえで興味深い。それによるともっとも引用回数が多いのが菅江真澄の『真澄遊覧記』で、この書を引いた柳田の著述の数は六六にもものぼる（飯澤 二〇〇〇 一九八～二〇一）。『山島民潭集（一）』に限らず、柳田は真澄の紀行文を様々な個所で参照していたことになる。それだけ柳田にとって、真澄の存在は大きかったことなるう。

菅江真澄は本名白井秀雄。宝暦四（一七五四）年に三河国に生まれて国学・本草学などを修めた後、三〇歳で故郷を離れて以後、信濃・出羽・陸奥・蝦夷地をめぐり、その見聞を精緻な図絵を交えた多くの紀行文とした。四八歳で再び秋田に入った真澄は、秋田六郡の地誌作成などに従事し、文政一二（一八二九）年にこの地で客死することになる（磯沼 一九九八 a 八八）。その紀行文は、後に『真澄遊覧記』と一括して世に知られることになった。

柳田は昭和に入るや、真澄についての言及を数多くの場所で見出す。雑誌『民族』への「菅江真澄の故郷」掲載を皮切りに、書き下ろしの「真澄遊覧記を読む」所収の『雪国の春』を昭和三年に刊行。折しもこの年は菅江真澄の没後百年祭で、柳田は秋田図書館で記念講演を行う。また翌年には自らが代表者となって真澄遊覧記刊行会を結成。『真澄遊覧記』から手始めに長野県に関係するものを選び出し、覆刻本と自ら監修した校訂活版本をセットにして次々と刊行するにいたった。

柳田が菅江に対する関心を抱いたのは、より早い時点のことである。山方香峰から『真澄遊覧記』について聞いたのは明治末年頃のことと、その後「還らざりし人」と題して真澄について初めてまとまった文章に

したのは大正九年だ。現在、成城大学民俗学研究所の柳田文庫には、「諸国叢書」と題して写本を主とする和装の書が百十余冊、ある。その筆写役を担った一人が、『人類学雑誌』や『郷土研究』に寄稿していた羽柴雄輔である。真澄の価値を認めていた羽柴がその自筆本を筆写し、大正二年にそれをさらに書き写して柳田に呈しており、その関心を刺激したという経緯があった(田中 一九九三 一一一)。

大正五年に長野県の教員組織・信濃教育会の支部である諏訪教育会での講演を皮切りに、会とのかかわりを続けてきた柳田。真澄に言及する機会が集中した昭和初年、その関与について伊藤純郎の整理から年ごとに見ていくと、まず昭和三年には二度の講演、機関誌『信濃教育』への「方言研究の意義」寄稿、自ら指導監修した『郷土読本』の刊行といったように、多様な関連事項が並ぶ。翌年は四度にわたる講演および『東筑摩郡誌別篇』への「序説 家名小考」の寄稿が続くといったように精力的だ。さらに五年四月には「真澄遊覧記信濃の部」刊行記念会で三日間にわたって「民間伝承論大意」と題する講演を実施(伊藤 二〇〇四 一七一)。この講演は、柳田の学にとって一つの画期となるものであったことは、言うまでもない。柳田が自らの学を大きく展開する過程と、菅江真澄への関心の高揚は同時並行していたのだ。

なぜ柳田は真澄に関心を寄せ、そしてその著述の活字化に尽力したのか。真澄の秋田領内の地誌について、「元来旧記といふやうなものはない土地だが、それ等は有る限り勿論すべて目を通した上に、主として材料を自身の踏査と、住民の談話から得ようとした」と、文献だけではなく実際の聞き取り調査に依拠した方法に柳田はまず着目する。そのうえで「あの時代に企てられた地誌類の中では、全く類のない珍しい方法で、単に百年後の各村に好記念を遺したといふ以上に、今後の我々の

事業に対しても、立派な手本を与へたと言つてよい」と高く評価した(柳田 一九九八b 四四七)。柳田が長野県でそれまで参与してきたくつもの調査を踏まえたうえでの真澄評価と言つていい。自らが目指す新たな学の先駆者として、菅江真澄は位置付けられているわけである。

柳田が目にした『真澄遊覧記』自体、閲覧制限のあった内閣文庫所蔵だったように、当時のメディア環境では、資料的価値が高いものであった。でも一般人が容易にアクセスできる状況には程遠かった。それゆえこうした文字記録を活字化するための作業は、柳田にとって大きな課題となった。たとえば大正一五年に『岩手日報』紙上に連載した「郷土叢書の話」の一節。地方図書は「これを公器として万人が自由に搜索し、一方には始終これを棗として次々に未開の野に分け入り、他の一方には直接に故人の真率なる感動と相触れて、われ知らず昔をなつかしみ、又郷人を愛するの情を起すのでなければ、まだまだ地方の学問を盛大ならしめることは六つかしい」と、書物の重要性を訴える(柳田 一九九八a 三七七)。郷土研究の前提となるのが、各種資料にアクセスするためのインフラ整備であったことに柳田は十二分に自覚的だ。

柳田が内閣記録課長時代、内閣文庫の新書庫が落成し蔵書の移転がなされた。これを機に図書の配列方法を変更させるとともに、資料の目録整理に着手。その完成後には内閣文庫書誌による叢書の出版、国内中の写本所在目録の作成を夢見ていた柳田にとって(飯澤 二〇〇〇 一九〇)、知られざる文献資料の所在を明らかにし、いかにして活字メディアという形で広範に流布させるかという課題は、ある時点まで大きなものであったことは疑いえない。自らが内閣文庫で享受しえた特権を特権のままとせず、より広範な層が利用できるような配慮を柳田は心がけていた。

各地方それぞれに所在する文献資料を、活字メディアによって流布させる効用は何か。柳田が唱えた全国の事象相互を比較する作業が、メディアのインフラ整備によって可能となる点がそれだ。真澄遊覧記刊行会から昭和五年刊行の校訂活版本『奥の手ぶり』巻頭に柳田が寄せた一文は、端的にその効用を示す。まず真澄が「何人よりも熱心に土地の風習を観察して居た。さうして折がある毎に其記憶を人に語り、又綿密に比較をして見ようとするのが、此遊歴者の誠に結構なる癖であつた」と、各地の比較を怠らない視点の確かさに目を向ける。さらにこの書が新たに公になることによって、二つの新たな興味が生じると柳田は言う。一つは真澄が記録したこの下北半島の正月生活が、同じ土地で百三十七年の時を隔てて何が変遷し、また依然として一致しているのか、その理由は何なのかという興味だ。今一つの興味は九州四国の山の村、あるいは岬の片端に古く住む部落でこの書から微笑を禁じ得ないような「偶合」を発見できる、というもの。「我々が真澄遊覧記を刊行せんとする本意は、本当は茲に在つたのである」と、過去と現在、そして何よりも全国の事象との比較に読者の目が開かれていくことへの期待が表明される（柳田一九九八b 五〇三、五〇四）。その期待を実現する手段として活字メディアが活用できる段階に、昭和初期のメディア状況は達していたのだ。

柳田に関心を寄せる者が、自分なりの問題意識を何らかの形で表現できなければ、次第にその関心は失せていくことだろう。そうならなかったために知のデータベースを構築して共有する営為は、運動体としての民間伝承の学を推進するうえで不可欠のものだった。長野県で柳田国男を受け入れていくのに大きな役割を果たした胡桃沢勘内に続いて見落とせないのが、次章で取り上げる明治二十七年生まれの教員・小池直太郎だ。信

濃教育会の機関誌『信濃教育』に大正八年、名もなき任侠の鳶職について述べた「鳶初について」の掲載を嚆矢として以後、民間伝承に関する文章を度重ねて同誌に寄せていく。柳田国男による炉辺叢書の一冊として『小谷口碑集』を後に上梓した小池は、その初期の執筆にあたってどのような資料をいかなるルートで入手していたのだろうか。その過程が明瞭にうかがえるのが、大正九年の『信濃教育』六月号に掲載した「いもの泡」だ。ここからは史資料の入手自体、まだ限られていた大正中期のメディア状況が、改めて浮かび上がってくる。

「いもの泡」は主に狐や狸、猪に化かされた話を扱った五ページほどの長さのもの（小池 一九二〇）。「日常茶飯と思われる事実の中に重大な意義を求めて」いくことの重要性を指摘している点で、また自らの小論を「デモノロジーの材料」だとし末尾には「デモノロジーに関する柳田先生の論文の一節をお借りして」とある点で、柳田の強い影響を読み取ることができる。ここで小池が多く依拠しているのは、県内日吉村で大正三年に『日義之里』という冊子を刊行した松原栄助の未刊の稿本である。小池のもとにある日松原が訪ね、「自分がこの年迄に直接間接に見聞し遭遇したことで、後の人に伝えて置きたい事どもを書き綴つて」まとめた稿本に序文を書くように依頼したため、小池はこれを目にすることができたのだ。いわば偶然、手にした資料ということになる。

その他ではどうか。活字化されたものでは、先に挙げた『日義之里』と近世の地誌『吉蘇志略』がある。後者は信濃史料編纂会によって『信濃史料叢書第四』に所収、大正三年に刊行されたものだ。また柳田国男の著作で言及されているのは大正八年に『東京日々新聞』所載の「一目小僧の話」、同紙大正二年の「隠里の話」である。県内の史料集の刊行がなされていたとはいえ、そこで入手できるものの数はおのずと限られ

ていた。しかも活字化されているにせよ、すぐに目を通すことが叶わないことも珍しくない。

先に挙げた柳田の著述にしても、小池が所持していたものではない。胡桃沢勘内に手紙で切抜の拝借を申し出て入手したものだ。その経緯を記す大正九年五月一〇日付の胡桃沢勘内あてのはがきは、勘内の子息友男の書に紹介されている。それによれば柳田の「狸とデモノロジー」ほか、新渡戸稲造の「分福茶釜」、戸川残花「たぬき」などを讀んだことを述べた後、「△一ツ目小僧（蛻庵稲荷ニ関して）木地屋（当地の木地屋に関して）の新聞切抜を御貸し下さい」と貸与を求めていることがわかる（胡桃沢 二〇〇四 四四五）。民間伝承への関心が、資料をめぐる当時の不十分な情報環境を補完するべく、読者のネットワークを編成しつつあった。明治以降、張り巡らされた全国の郵便システムが、手紙やはがきを通じたやり取りを可能とさせていたことは言うまでもない。

活字情報ばかりではなく実地に資料を得る試みがあったことも、先の小池の文章から読み取れる。前任校の松本女子師範学校付属小学校在籍時、師範の生徒に書いてもらった「郷里の口碑伝説」から一つ、事例として取り上げているのがそれだ。しかし調査法自体、まだ体系的に地方在住者に示されていたわけではなく、小池も模索段階にあったことは間違いない。地方在住の者は資料を入手するうえで、数多くの障壁に向き合わなければならなかった。それだけに文献資料にかぎらず、各種資料にアクセスするための利便性向上は、運動としての民間伝承の学を推進するうえで柳田にとって喫緊の課題だったといわねばならない。

昭和四年以降の『真澄遊覧記』の出版事業は、長野県内に住む民間伝承に関心を寄せる者たちに対して、多大な求心力を及ぼすものとなる。その刊行の流れは以下のようなものとなった。信州洗馬から越後へ向か

う紀行『来目路の橋』の覆刻本と校訂活版本の揃いの出版が昭和四年八月。以後、こうした揃いの形式での刊行は最後まで続く。同年には三河から洗馬への軌跡を記す『伊那の中路』と、姥捨て山に月見に行った記事のある『わがこゝろ』の上梓が相次ぐ。以上は「真澄遊覧記刊行会」の「信濃の部委員」名義のものである。その翌年、信州とはかわらないという意味で変則的ではあるが、東北・下北での見聞を記した『奥の手ぶり』を出版。こちらの編集に携わったのは炉辺叢書『津軽旧事談』の著者、中道等である。その間に思いがけず真澄ゆかりの信州・本洗馬の土蔵から発見された『菴の春秋』をもとに同じ年、覆刻本と校訂活版本が出て一連の刊行事業は締めくくりとなった。

こうした刊行のいきさつについては、中心的役割を果たした胡桃沢勘内が『信濃教育』に一文を寄せているので、参照したい。長野県で柳田の学を受け入れる窓口となった胡桃沢が『真澄遊覧記』の名前を知ったのは、大正のはじめ頃、雑誌『郷土研究』誌上だった。しかしその具体的内容について知ったのは柳田の『雪国の春』を讀んでからのことであり、さらに文章そのものに触れたのは昭和三年、小池直太郎が編纂した信濃教育会『郷土読本』所収のものが初だったという。たまたま昭和四年に『真澄遊覧記』の『来目路の橋』を早川孝太郎が所持していることを知り、せめてその挿絵だけでも写して何人かで複本を作ろうという話となった。一方小池直太郎も『来目路の橋』の写本を信州に持ち帰り、それを信濃教育会東筑摩部会の大池蠶雄がさらに筆写。他方、東筑摩郡洗馬村役場の中村盛弥の弟が、『雪国の春』に触発されて上野図書館所蔵の『伊那の中路』中、地元に関する部分を抜き書きして兄のもとに送付。それを活版化して村の有志だけでも頒布しようという話となる。こうして同時多発的に『真澄遊覧記』への関心が高揚した中、昭和四年の

五月、信濃教育会東筑摩部会の春季総会の講演に招かれたのが柳田だった。東筑摩部会と柳田とは大正七年に『東筑摩郡誌別篇』調査委員会で講演を行って以来のつながりである。講演の後、『真澄遊覧記』の出版の件を切り出した柳田に、周囲が賛同してこの企画は一気に動き出す〔胡桃沢 一九三〇a 八四〕。

柳田が提示した条件は一つ、三百部を長野県側で引き受けるというもの。それを受けて真澄遊覧記刊行会が発足する。柳田を代表者とした刊行会の「信濃の部委員」は胡桃沢勘内、矢ヶ崎栄次郎、大池蠶雄、池上喜作の四名があたった。矢ヶ崎は信濃教育会東筑摩部会副会長、大池はやはり東筑摩部会に所属し真澄が一年余り滞在した洗馬村在住ということからである。すぐさま発起者の依頼をはじめ、四人の委員を含めて四五名が名を連ねるにいたった。その顔触れを見ると、視学・校長をはじめとした教育界からの参加が多い〔胡桃沢 二〇〇四 五〇五〕。県内各地からの発起者の数はさらに増え、『伊那の中路』に挟み込まれた四つ折りのパンフレットを見ると、その時点で総数七十二名にも及んだ。会員数も当初の予想をはるかに超える。会員募集をしたところ、「実は三百を危ぶんだのに締切以前に四百になり五百になり、遂に七月の末には、一先づ六百八十で締切らねばならぬことになった」と胡桃沢勘内は、その熱気を伝える〔胡桃沢 一九三〇a 八六〕。地方であっても呼びかけ次第で七百人近くも読者をあらかじめリクルートでき、出版にこぎつけられるまでに達したのが昭和初期のメディア状況だった。

さらに雑誌媒体への広告によって、より幅広い読者の獲得が可能となった。『真澄遊覧記』の発行元、東京の三元社は雑誌『旅と伝説』の発行元であるだけに、同誌にもたびたびその広告が掲載されている。一例を示せば昭和四年八月号では一ページを割いており、その案内は「遠い過

去の伝承をたづね、平民生活の現在を観察する、文化研究の学問の興隆とともに、此の旅日記が貴重な資料となり、紀行の書としては他に例のない、学問上の価値をもってゐることを認められるやうになったのである」とその意義を説く。柳田の学問上の進展と結び付けられて、この書が位置付けられて読者に訴えかけられたのである。

『真澄遊覧記』の特徴は、美しい挿絵が添えられていることにある。しかしそれが逆方向に作用して、それ以前の覆刻の障害となってきたことは否定できない。「實際余りに此絵が見事であることは、今後の覆刻を妨げるばかりで無く、又精確なる写しを世に残すことを困難にして居る」と、柳田を慨嘆させたほどである〔柳田 一九九八b 四四六〕。だが今回の覆刻では、高度な印刷技法が駆使されて問題は解決に至った。校訂活版本『来目路の橋』の「巻の終に」によると「はじめには三色乃至四色版の計画であった挿絵は、遂に木版応用十三度刷の複雑なものになって、原本の趣を其儘に懐しい百五十年前の色を伝えることが出来た」のだという。それだけに「此書の覆刻の将来の標準となるもの」だと、その刊行の意義が強調される。実際、先の『旅と伝説』掲載の広告も「挿絵写真オフセット木版併用十三度刷」とあって、「原本そのまゝに複製」ということを謳う。

そうしたこともあって、『真澄遊覧記』の刊行は長野県という範囲を超えて歓迎された。胡桃沢勘内から小池直太郎宛の昭和四年一〇月一日付けの手紙（信濃教育会教育博物館所蔵）に五枚ほど封入された、『来目路の橋』刊行後、作成されたちらしの宣伝文を見よう。その一節には「東京其他各地に於ても識者の歓迎する所となり、伊東忠太博士・三田村鳶魚氏・平福百穂画伯などは、各其専門の立場から激賞されて居りますと共に、出版印刷界にも驚異の的となって居ります」とあり、その好

評ぶりを伝えている。また胡桃沢勘内の手控えの手帳には、『来目路の橋』印刷部数として覆刻本約千三百部、校訂本一千五百部とあり、当初の予想をはるかに上回る数字となったことが読み取れる〔胡桃沢 二〇〇四 五〇八〕。

胡桃沢らの想定を大きく超えた真澄遊覧記刊行会の会員数からわかるように、長野県内での反響が大きかったことは間違いない。胡桃沢はその様子について「たゞでさえ読書欲の盛んな此地方の、主として青年有識階級に異常な歓迎を受けた」と熱狂ぶりを記す〔胡桃沢 一九三〇c 八六〕。とりわけ真澄が一年ほど滞在した本洗馬での高揚は著しく、真澄の未だ発見されざる書の探求へと力が及んでいく。その結果、『いほの春秋』を含め四巻が新たに見つかって、『菴の春秋』としてほどなくして刊行される。発見の経緯を記した胡桃沢は「他の地方に於いても、名のみ知って未だ発見されぬ遊覧記のいくつかが、次第に見いだされて行く見込が何となく有望のやうにも予感されることは、愉快に堪へぬところである」〔胡桃沢 一九三〇b 一〇八〕と、末尾で読者への期待を表明している。

校訂活版本『来目路の橋』の「巻の終に」は、「我郷土を新に見かへらうとする人々の為に」刊行したと目的を記す。真澄の紀行に対する関心の高揚は、郷土に新たなまなざしを向ける契機となるべきものであった。さきの「巻の終に」に「此覆刻の事業は、半ば骨董趣味を交へた流の古書覆刻と、同じものではなかった」と念押しをしているのは、その明確な意思表示とみるべきであろう。校訂活版本『奥の手ぶり』の奥付の次のページは、雑誌『旅と伝説』の紹介だ。「趣味と研究を兼ね備へた本邦屈指の民俗、伝説、口碑、昔噺、方言、玩具、祭礼、旅行等々に関する定期刊行物」だとその性格を記し、「重なる執筆者」として柳

田や折口信夫、中山太郎他の名前が列記されている。版元の三元社の宣伝としての性格は言うまでもないが、単にそれだけではなくこの『奥の手ぶり』を手にした読者が、さらにその関心を深められるような配慮としてもみなせよう。

そうした読者を組み込んだネットワークの姿の一端が、校訂活版本『伊那の中路』からは見いだせる。末尾にある「地名と人名」は、これまでの刊行分に登場した固有名詞についての注記としての性格を持つ。しかしこれは編者単独の作業結果ではない。「信濃の部委員から諸方に照会して得た資料を試みに茲に列記」したものであって、何人もが注釈作業に関与していたのである。この項は二二ページにも達し、報告を寄せた者の数は一七名に及ぶ。『真澄遊覧記』の活字化によって生じた問いを共有し、その答えを見出そうとする知のネットワークの存在がここからは浮かび上がってくる。戦前、柳田のもとにあって郷土研究組織の運営発展に尽力し、また画家として活躍した橋浦泰雄は昭和四年、信州松本で「橋浦泰雄君画会」という頒布会を開催した。運営の中心役を担ったのは、胡桃沢勘内。その後ほどなくして胡桃沢は今度は自らの肝いりで「話を聞く会」を結成し、橋浦や柳田、折口信夫他を招く〔鶴見 二〇〇五 八〕。当時、民間伝承への関心を軸に立ち上げられたネットワークは幾重にも重層しつつ、ゆるやかな運動体の体裁をなしていたのだ。

昭和四年に校訂活版本『来目路の橋』冒頭に柳田が寄せた一文「百年を隔てゝ」は、他の真澄関係の論考と合わせて昭和一七年に『菅江真澄』と題して一冊にまとめられた。その際、末尾に「追記」が付け加えられ、初出時以後の動向がわかる。「この一文を草草した際までは、まだ信州にはほど多くの、壮年白井氏の文章が残って居らうとは思はなかった」と

柳田は言う。しかし『来目路の橋』の刊本を読む人が多くなると共に、先づ方々から歌の短冊が出てきた」と述べ、さらに本洗馬での四冊の写本の発見にも話は及ぶ(柳田 一九九八b 四九一)。活字化を契機として未発見の資料が発見された恩恵を柳田が被ったことが、こうした記述から読み取れよう。だがその一方で今まで手にすることのできなかった『真澄遊覧記』に触れ、郷土への関心を高揚させていった一群の人々がいたことも、こうした発見の経緯からほの見える。

郷土研究にかかわる問題関心を共にする者に対して、いかに資料にアクセスしやすいような情報環境を整えるのかという問題が、当時の大きな課題だったことはすでに述べた。その解決策の一例が、ここで示したような真澄遊覧記刊行会による読者のネットワークの編成である。それは資料の活字化をたんに推し進めるというだけではなく、民間伝承をめぐる問いを共有する運動としての性格をも期待されたものだった。それを一方で支えたのが、昭和初期の出版状況であったことは言うまでもない。採集資料を求めるための実地調査の立ち上げだけではなく、既存の文献資料を活字化していくことが、当時の柳田の実践の大きな柱をなしていた。文献資料から採集資料へ、という直線的な流れがあったわけは、けっしてない。

二 小池直太郎と『一茶叢書』『郷土読本』

活字化されていない文献資料の出版活動を通して、知のデータベースを共有するネットワークの構築を目指す『真澄遊覧記』刊行の試み。長野県では同様の試みは既に存在しており、それが『真澄遊覧記』の刊行実現を支える背景をなしていたのだった。胡桃沢勘内とともに柳田の学の窓口役を果たした小池直太郎が、編集の中心を担った『一茶叢書』

の刊行がその取り組みだ。また同じように編集役を担い、昭和三年に信濃教育会から刊行された『郷土読本』も、従来入手しがたかった文献資料を中心として編纂されたもの。その意味で『真澄遊覧記』の刊行は、小池の営みの延長線上に位置付けられる。ここでは小池が取り組んだ両者の編集作業の過程を通じて、改めて当時の読者のネットワーク編成について論じたい。

明治二七年に県内更級郡青木島村で生まれた小池直太郎は、長野県でいえば胡桃沢勘内に続いて柳田に深く影響された一人だ。長野師範学校を卒業後、東筑摩郡片丘小学校に在職中の大正六年に、『東筑摩郡誌別篇』編纂の中央委員に就任。これは信濃教育会東筑摩部会が柳田の指導を受けて着手した事業であったことから、小池は柳田の学問に触れることになった。その翌年、松本女子師範学校付属小学校に転任したため、着任からほどなく中央委員の任を離れた。とはいえ今度は松本在任の胡桃沢勘内と接する機会が増え、民間伝承に関する知識は深まっていく。

その関心はひとまず大正一一年、炉辺叢書の一冊『小谷口碑集』として結実した。これは県内北安曇郡小谷での聞き取りによるもので、「天狗の話」「山姥の話」「河童の話」といったような項目に従ってまとめられている。大正一五年になると信濃教育会編纂部の専任となり、『信濃教育』の編集に従事。在任中、柳田にも寄稿を依頼して、誌面にその原稿が度重ねて掲載されていく(胡桃沢 二〇〇四)。

その一方で小池は早くから信州ゆかりの俳人・小林一茶に関心を寄せていた。一茶の日記を編纂した『一茶日記抄』を上梓したのは、『小谷口碑集』刊行の前年、大正一〇年のことである。これは一茶の生涯を年代順に日記と作品からとらえようとすることで、版を重ねた結果、昭和一一年には改訂増補五版の発行にまで及んだ。長野県の一茶研究で独自

の地位を築いたのが、小池だった。そのため信濃教育会で『一茶叢書』刊行の計画がたつと編集主任役を担うこととなり、大正一五年から昭和五年までその任にあたる。叢書は古今書院からの出版で、その構成は正編九篇一冊、別篇三冊。各篇の大半に解説を書くといったように、一茶に対する小池の造詣は深いものだった。

昭和一八年に長野市三輪小学校長在職中、小池は病没する。戦後、昭和三年に柳田の力添えもあって、その遺稿集が『夜啼石の話 信濃民俗誌』と題して刊行された。そこに収められた九編には、正面切って一茶に言及したものはない。ここでの選択では、一茶は陰に隠れてしまっている。しかし民間伝承への関心と、一茶へのそれとは小池にあって不可分のものだった。小池の身近にあった教員・大月松二は後に、「先生の研究は民間伝承・俳諧・国語教育と大きく三つに分けて考へられるが、これはばらばらに分離して居るのではなく、その研究態度は一貫したものであった」と振り返る。この三者を共に貫く小池の姿勢はどのようなものであったのか。「身のまはりの日常生活、平凡な事象から学んでゆかう、村人の生活の中に、民衆の喜怒哀楽の解決の裡に人生を、また教育を見出してゆかうとされたのである」と大月はその本質を突く〔大月一九四三 六一〕。

民間伝承と俳諧双方とを結び付ける視点自体は、小池独自のものではない。むしろ柳田国男の問題関心を、小池は踏襲したといった方が正確だ。実際、柳田の俳諧とりわけ芭蕉の俳諧への言及は少なくない。柳田が俳諧に着目したのはそこに近世の庶民生活の姿が豊富に詠み込まれていたからだ、と高藤武馬はいう〔高藤 一九八三 一一二〕。大正一三年に発表された「木綿以前の事」は、冒頭で芭蕉の七部集を引用して木綿が生活に与えた影響について説く〔柳田 一九九八c 四二九〕。

俳諧への関心が集約されたのが、昭和一四年に単行本化された『木綿以前の事』である。同書に所収された「山伏と島流し」では、「俳諧には時代の生活が現はれて居る」とし「平凡人の心の隅々が、僅かにこの偶然の記録にばかり、保存せられて居て我々をゆかしがらせるのである」という。そして「歴史を一つの温か味のある学問とする為にも、我々はもう一度、古今の俳諧を見直さなければならなかった」とその意義を強調する〔柳田 一九九八c 五六六・五六九〕。昭和初期、一国民俗学の確立に邁進する柳田の姿からは、ともすれば見失われてしまうのが資料として俳諧を重視する姿勢だ。

柳田がとりわけ尊重していたのが松尾芭蕉である。昭和一二年の講演を基にした「生活の俳諧」では、「私は熱心に於ては何人にも譲らざる俳諧の研究者、殊に芭蕉翁の、今の言葉でいふフワンである」とその愛好ぶりを吐露する。その俳諧は「とにかくに時代の姿を是ほどにも正確に、後世に伝へ得た者も少な」く、「あらゆる階級の小事件の、劇にも小説にもならぬものを抱擁して居る」〔柳田 一九九八c 五七七・五九一〕というのが、その評価の理由だ。文学としてというより日常生活の記録性という点での評価は、菅江真澄に対するそれと共通する。『木綿以前の事』単行本化に際して、柳田は自序に「七部集は三十何年来の私の愛読書であります」と記す〔柳田 一九九八c 四二八〕。そこから逆算すれば、真澄の著作を初めて知ったのはほぼ同時期に、七部集に親しんでいたことなるう。

とはいえ小池自身の一茶への関心は、当初から民間伝承へのそれと関連していたわけではない。大正一〇年に上梓した『一茶日記抄』の「はしがき」には、当時の小池の観点が端的に表出されている。それによれば芸術家としての一茶と人間としての一茶という二つの見方があるとす

れば、「人としての一茶という方に主眼を置いて、材料を取捨選択して来た」というのが自らの立場だという。この書を読めば「一茶といふ人は斯う云ふ人であったかといふ大体の輪郭は読者の脳裏に描けることと信じてゐる」とあって、その関心はあくまでも人間一茶にあることは否定できない〔小池 一九三六 四〕。民間伝承への関心から一茶を読み直すようになったのは、『一茶叢書』の編纂に携わってからとなる。

「一茶叢書刊行の趣旨」が『信濃教育』の巻頭に掲載されたのは大正一五年五月号。それによれば一茶の資料については「猶未だ一般に公表されたことのない作品や手記の未完のままに遺棄されてゐるものも尠くない」「一茶の作品に関しては、大部分その真筆本が今尚郷里を中心とした関係の諸家に蔵されてゐるので、この真筆本によって確かな定本を刊行しておくことは」今日の一茶研究だけではなく国文学研究全体にも大きく寄与する、と謳う。いまだに活字化されていない一茶の著述を見出して、書籍という形で公にすることを目指すここでの趣旨は、真澄遊覧記刊行会でのそれと重なり合う。

同じ号から連載される「一茶叢書刊行消息」欄には同様の趣旨と併せて、「我が信州が生める天才一茶の真面目を世に問はんとする企て」という言葉も見える。折しも没後百年の記念祭がこの年にあたり、その著述の刊行を通して郷土の偉人の顕彰を果たそうとする意図がうかがえよう。その姿勢は一茶の二年後に没後百年を迎える真澄の遊覧記を活字化し、さらに未発見の『真澄遊覧記』を地元で探し出すことに熱中する姿と相通じる。信濃教育会での一茶をめぐる動向は、そのまま菅江真澄への応対のモデルとなるものであった。

小林一茶の研究史上では、大正から昭和初期にかけては興隆期として位置付けられている。自然主義の評論家として活躍した相馬御風や、自

由律俳句作家の荻原井泉水による一茶文学の啓蒙と普及活動。また俳文学者の勝峰晋風は「一茶時代」という時代呼称を提唱し、芭蕉や蕪村と対等に位置付けた。勝峰は『新選一茶全集』（大正一〇年刊）、『一茶旅日記』（大正一三年刊）、『一茶一代集』（昭和二年刊）他、この時期重要な仕事をなしている。こうした中で刊行された『一茶叢書』は、「永く一茶研究の基礎資料として活用」されることになり〔矢羽 一九九三 五五四〕、一つの画期をなすものと受け止められた。

他方、真澄研究では明治大正期にその紹介が始まった後、戦前・戦中期が啓蒙期として扱われている。この時期で注目されるのは、真澄の著作を収載した『南部叢書』第六冊（昭和二年刊）、『秋田叢書』全一二卷（昭和三―一〇年刊）、『秋田叢書別集 菅江真澄集』全六卷（昭和五―八年刊）の刊行である。また柳田が主導した『真澄遊覧記』の上梓は今日の真澄研究の基礎を築き、研究の機運を切り開いたと評価される〔磯沼 一九九八b 二八―三四〕。一次資料を見出し、それに史料批判を加えたうえで活字化していくというそれぞれの研究史上の画期に、長野県での一茶と真澄の刊本化の流れは位置していたことになろう。ともに程度の差はあれ、柳田がそこで協力していたことも見落とせない。その意味で『真澄遊覧記』の刊行は、『一茶叢書』出版と同時代的脈絡の中で押さえなければなるまい。

先の大正一五年五月号の「一茶叢書刊行消息」を見ると、まず前年度に信濃教育会の事業として正式に発足し、一〇名にも及ぶ蒐集委員が県内各地区に配置されたとある。さらに五名が進行委員役にあたった。この両者ともに担ったのが小池だったことからわかるように、その果たす役割には大きな期待が寄せられていた。一五年度には特別会計として二、三五九円もの予算が組まれ、いよいよ『一茶叢書』の刊行に着手。

主任は一茶研究で知られる勝峰晋風、信濃教育会側の専任委員は小池という布陣である。県外の協力者の顔ぶれからも、この企画への意気込みが感じられる。『信濃教育』大正一五年七月号掲載の、信濃教育会「大正十四年度会務報告」のうち「一茶叢書刊行ニ関スル件」で紹介されている「在京各大家ノ援助」を見よう。そこに挙げられた氏名は「島崎藤村、柳田国男、幸田露伴、藤井乙男、藤村作、垣内松三、伊藤松宇」といったように、当時の名だたる文学者、国文学研究者が並ぶ。柳田もその支援者の一人だったのである。

叢書としてまず『第一編 享和句帖』が同年六月に発行。一円六〇銭の定価で、八日発行の後、すぐさま一五日付けで再版発行となっているので、好評のうちに読者に迎えられたことがわかる。その編集上の特徴は、叢書の刊行と同時進行で『信濃教育』誌上「彙報」欄に、「一茶叢書刊行消息」（以下、消息と略記）が掲載されていることである。内容的には主に小池が編集作業の過程で見聞した、一茶の詩文についての解説が中心をなす。この「消息」を通じて、小池は叢書の枠を超えて読者に一茶への関心を喚起するべく呼びかけを行ったわけである。「消息」掲載が始まってほだない大正一五年一〇月号には、「誌上談話欄の開放」という見出しがある。次号以降、談話欄を設けて「一茶研究に関する研究談の交換場にしようと思ふ。御意見や御質疑は大小を問はず御投稿を乞う」と、読者を促す。

「誌上談話欄」は小池の見解を誌上に示すだけではなく、その呼びかけに応じた読者からの声を拾い上げ、相互の交流を図るための目論見だ。雑誌を通して問題関心を共にする読者とのネットワークを作り上げていくことは、当時かなり一般的だった。その具体例としてここでは雑誌『歴史地理』と、国民的大衆雑誌『キング』を取り上げたい。その頃の

雑誌が果たしていた読者相互を切り結ぶメディアとしての役割が、両者の誌面からは端的にうかがえるからだ。

明治三二年に発足した日本歴史地理研究会（後に学会に改組）が、同年に機関誌として発行したのが『歴史地理』だ。その発起人の一人として尽力した喜田貞吉による講演録、「歴史地理学研究所資料の供給に就て地方会員諸君に望む」を見よう。これは阿波国史談会の設立の際、講演で述べた点について「我が歴史地理学会在地方会員諸君に対して」も希望するという趣旨で、明治四二年に掲載されたものである。ここで喜田は「諸君は各其熟知せられたる地方の遺蹟遺物記録伝説などを調査して、これを会の機関雑誌に発表し、相互の材料を交換して、県下の事情を明らかにせんことを私は希望致すのであります」と訴えた（喜田一九一〇 六四）。個々の会員が調べたことについて誌面を通して「交換」し、共有することへの期待表明である。喜田の講演録を掲載した同じ号を見ると「問答」という欄があって、読者からの一五の問いとその答えとが九ページにわたって続く。「問答」とは、読者との「交換」を図るための一つの仕掛けとして機能するものであった。今一つ、その読者層にも注意したい。先の号末尾には「会告」として「地方在住教育家諸氏並に篤学諸氏の入会を歓迎す」とあり、『歴史地理』の読み手としてはまず地方の教育関係者が想定されていたのである。

大正一三年に講談社から創刊されるや、国民大衆雑誌として一世を風靡した雑誌『キング』でも、ほぼ同様の事態が展開する。活字メディアの急成長を背景にして、「百万雑誌」を目標に掲げたのが『キング』だ。佐藤卓己によれば『キング』がもたらしたのは「参加の感覚」である。雑誌と読者との親密性は、手紙というメディアによって補強されていた。同誌では手紙で寄せられた読者の感想文などを紹介する「読者倶楽部」

欄が設けられていたのに加え、短歌や俳句、川柳、民謡など「懸賞読者文芸欄」があって、毎号幅広く投稿が呼びかけられた。さらに各種当選者をリストにして公表することによって、パーソナルな参加意識をおおりのたてたのだった(佐藤 二〇〇二・一三三)。さらに『キング』は学校教師の支持を獲得するべく、師範学校、高等女学校、中学校校長に積極的に働きかける。「全国教育家のキング評」と題して、推薦文を寄せてもらって掲載したのだ。教え子たちへの感化を目指したものであることは言うまでもない(佐藤 二〇〇二・三七)。

こうした教員層を読者のターゲットとし、そのネットワークを組織していくという雑誌の戦略性を強く自覚していたのが柳田国男だと言っても間違いはない。佐藤健二によれば柳田の雑誌観は、はがきや郵便で自由に編集できる紙の上の「広場」だという。たとえば大正二年に柳田が創刊した雑誌『郷土研究』には「紙上問答」欄が設けられ、読者の投稿による問いかけと答えのコミュニケーション欄が設けられていた。雑誌の運動としての側面をうかがわせる、特徴ある欄だと佐藤はいう(佐藤 二〇〇一・二三〇・二八四)。同じく大月隆寛も、「問いかけ」に対する「応答」という形での交通が雑誌というメディアを通して成立するといふ仮説が、初期の柳田の方法を支えていたと指摘する(大月 一九九七・五二)。さらに柳田が読者として強く念頭に置いていたのが教員層だったことは、その長野県への関与が主に信濃教育会を通してのものであったことから明白だ。小池が『信濃教育』誌上に寄せた文章には、『郷土研究』への言及がある。同誌が大正六年に休刊した際、最終号末尾にある「寄稿者名簿」には胡桃沢勘内の名前があるので、小池は胡桃沢から借用して目を通したのだろう。小池が『信濃教育』「一茶消息欄」で「誌上談話欄」を設けた際、『郷土研究』の「紙上問答」欄を強く意識し

ていた可能性は高い。

小池直太郎は読者からの声を拾い上げる一方で、自ら「一茶消息欄」を通じて読み手に民間伝承への関心を喚起していく。たとえば大正一五年八月号の同欄では「一茶と土俗」と題して、編纂中の『一茶叢書第二編 方言雑集』から関連する項を紹介している。ここではまず「病犬ニカマレタル時キズ口ニ葱ツケル妙薬也」「陰陽湯ハ水湯等分ニシテ吞」といった、民間療法にまつわる知識に触れている他、「山ニテ怪シキ人ニ逢時狐カ狸カヲ知ル方」といった以前から関心のあった「デモノロジー」についての事項にも話が及んだ。一茶の世界は柳田の説く新たな学問とも接点を持つ、というのがここから読み取れるメッセージだ。

「一茶消息欄」では、直接柳田へ言及した箇所も目につく。たとえば大正一五年一二月号では、『一茶叢書』に掲載した「宿借やどづかや掃除して寝る栗の花」について「ヤドウカについては、柳田国男先生の『山の人生』に興味ある研究が載ってると記憶する。読者の是非一度読んでごらんになるべき本だと思ふ」と一読を勧める。翌年昭和二年二月号でも、再びこの問題を取り上げて今度は『山の人生』を引用しつつ、論点を掘り下げた。次の三月号では、「一茶消息欄」に京城帝国大学の安倍能成の手紙が紹介されている。『一茶叢書』について触れた安倍は、「かういふ編述の外にも、更に信濃の民俗博物館(小規模にてよし)の様なものを設け」るよう提言し、「我国ではもう少し郷土研究を感ずる必要ありと存候」とその重要性を説いた。『一茶叢書』が郷土研究と結び付けられて反響を呼び起こしたことが、文面からは伝わってこよう。

そうした小池の意向が強く反映されたのが、柳田を講師に招いた一茶忌記念講演会だ。『信濃教育』昭和二年一二月号には、叢書刊行委員名義で講演会の案内がある。記事によれば、「我民族の民間伝承が奇しき

綾を以て織込まれてゐるものに俳諧文学がある」という。それはなぜか。「芸術としての俳諧は我民族特有の至境に位置を占めながら、その普及したること、数百年の永き、及ぼせる範囲の広範なる他に比喩を」見ない。したがって俳諧には「その取材に構想に民間伝承の織りなされたる決して偶然では無い」ということになる。そこで「本邦に於ける民族学^(民族学)の提唱者にして、且斯学の大成者たる柳田国男先生を聘し」たのだという。演題は「俳諧と民間伝承」と予告された。続く『信濃教育』昭和三年一月号「彙報欄」にある当日の報告によれば、昭和二年二月二日に百年忌を迎える一茶の建夜となる一日、その偉績を追頌する趣旨で講演会は開催され、「文芸の新展開」という題目で柳田が演壇に立ったことを伝えている。

その講演のしばらく前、『信濃教育』昭和二年九月号と十一月号には柳田の「小さき者の声」が掲載されていた。遊びなどの名称に対する児童の関与に触れたこの文章で、柳田は『一茶叢書』の一冊『方言雑集』から、二度ほど事例を引用している。その反響が後に続く『信濃教育』誌上一二月号に、早くも寄せられた。まず下高井郡の教員・大月松二が、遊びや月の名称について地元のもの^(もの)を報告している。さらに小池直太郎自身が柳田の文章の示唆によって稿を起したと、六ページにわたる「案山子の話」を載せる。本文中で柳田の『後狩詞記』や『海南小記』を引用して野生動物から農作物を守る習俗に触れた小池は、一方で一茶の句を文中で何度となく資料として使う。たとえば「笛吹いて山のかゞしの御礼哉」「目出度さやかゞしもつひの夕烟」といった句から、農村で現在も行われる案山子を主賓として餅やお神酒で丁重に供用する行事に話が及ぶ、といった具合だ(小池 一九二七 三〇)。一茶の句を通じて読者を民間伝承の世界へと誘おうとする姿勢が、ここには明瞭だ。

知られざる文字記録を活字化して流布し、知のデータベースを作成しようという小池の試みは、『一茶叢書』の刊行だけにとどまらない。信濃教育会から昭和三年に出版した『郷土読本』も、こうした営為の一つだ。小池が編集の中心役を担い、柳田の全面的な支援を得て作業はすめられた。この読本に準拠して信濃教育会の各郡市教育部会で同様の郷土読本が編纂されていったように、その及ぼした影響は大きい(伊藤二〇〇〇 三八)。

昭和三年の『信濃教育』九月号での彙報欄では、「郷土読本の発刊」というタイトルでその趣旨が紹介されている。それによれば採録対象となったのは「親しく地方民の生活に直面した理解ある観察見聞の実記がその殆んど大部分」であり、ここに描かれているのは「山の人生であり、農村の文化史であり、漁村海島の生活史である」という。その編纂過程で柳田が大きく関与していたことは「指導監修の労をとられ、文庫の蔵書中から材料を選択して与へられ、本文の原稿を校閲された上に態々標註の筆を採って下さった」という一節からも、明らかだ。同年『信濃教育』十一月号では「郷土読本に就いて」と題し、掲載した文章の解説を付す。執筆者は「手近なところにある事実^(事実)に直面して、農村とは何ぞや、地方とは如何、吾々の先祖はどんな風に生活して来たか、而して将来は如何進まねばならぬかを学ばなければならぬ」と、改めてその趣旨を繰り返している。

『郷土読本』に掲載された文章はどのようなものだったのか。先の「郷土読本に就いて」を見ると、たとえば菅江真澄『いななのなかみち』の「田植の頃」があり、「天明三年に信州に入り、天竜川に沿って伊那の溪を歩いた紀行」といった内容だ。その次の項は「熊谷氏伝記」から「野武士の気骨」。これは「大阪役頃の信州の山村の様子^(様子)が手に取る様に

書いてある」という解説である。信州に関する文章が目につくとはいえ、一方で笹森儀助の『南島探検』や、伊能嘉矩の『台湾蕃政志』が取り上げられているように、柳田の関心や人脈が採録対象を強く規定していたことがうかがえよう。

この「郷土読本に就いて」の末尾を見ると、「対照^{（マ）}を中等学生補習学校生徒、青年及び一般の人達に置いた」とあり、「教科書とし副読本とし自習読物として取扱はれての御意見」を寄せるように読者に乞う。とはいえ読者層が、これに限られていたわけではない。「郷土読本」の奥付にある「発売所」は信濃毎日新聞株式会社ではあるが、しかし実際の販路はより広い。たとえば雑誌『民族』の昭和四年第四巻第二号の末尾にある広告欄でも掲載があり、取次所は郷土研究社である。しかもこの時点で「再版売切、三版印刷中」となっていて、民間伝承に関心を寄せる者が幅広くこの書を手にしていたことがわかる。すでに述べたように、胡桃沢勘内が初めて菅江真澄の文章に接したのは、この『郷土読本』を通じてだった。それが後の『真澄遊覧記』の刊行につながっていく。手に入りがたい文献を活字化して読者に提示する知のデータベース化の取り組みが、さらにより一層そのデータベースの充実を図るべく読者を促し組織化させていった過程が、昭和初期の長野県での営みによって浮かび上がってくる。むろん、そこで柳田国男が果たしていた役割の大きさは言うまでもない。

最後に

しかしこうした文献資料の活字化を通じた知のデータベース構築の営みは、現在、きわめて見えにくい状況にある。その原因の一端は、柳田自身にあることは間違いない。文献資料を多用していた自らのかつての

著述に対して、昭和一〇年代半ば頃から次第に否定的な言辭を強めていったのである。たとえば昭和一五年刊行の「学問と民族結合」の草稿「比較民俗学の問題」では「巫女考とか俗聖即ち毛坊主の話とか、樹木信仰の痕跡とかに関する私の長々しい論文は、問題は民俗学上のものであっても、其方法は甚だしく不純だったと評せられねばならぬ。弁護の余地としてこの頃は、まだ資料が出揃わなかったのである」という（柳田一九七〇 六五）。こうしたトーンは以後も変わらない。昭和二一年刊行の『祭日考』所載の「窓の燈」では、「三十年ほど以前、まだ其採訪がまるで始まらなかった頃に、私はあまり大胆であったが一応は書いたものだけから、民俗学の資料を見つけようとしたことがある。それは概ね失敗に終わったようだった」とまで言い切る。ここでは神道史の文献の多さを勘案して、必要に迫られて今回はそれを使用せざるを得ないと続いているものの「柳田 一九九九 九七」、文献資料のやむを得ぬ利用から採集資料の駆使へ、という単線的な流れをイメージしていることに変わりはない。文献資料の活字化が促した読者のネットワーク編成という事態は、この時点では柳田の視野から全く欠落してしまっている。柳田の認識の中である種の断絶が生じたことを、この事態はうかがわせる。その断絶の画期の一つをなしていたのは、意外なことに昭和五年に真澄遊覧記刊行会が柳田を講師として迎えた「真澄遊覧記刊行記念講演会」である。真澄ゆかりの地での三日間にわたる演題として柳田が示したのは、その趣旨とは裏腹に真澄についてのものでなく「民間伝承論大意」。席上で配布されたその講演概要は昭和九年、『現代史学大系第七巻 民間伝承論』の序として所収される。しかしそれに目を通して真澄に触れることは、ない。ましてや文献記録の活字化を通して作り上げられる読者のネットワーク化の意義についての言及は、ない。

講演の席上にあつた胡桃沢勘内はその感想として、真澄のような「寂しい旅人の反省の旅の日記を探り出して、百年を隔て、興った斯邦の新しい学問の資料として之を採り、更に之を覆刻して、其功績を永く後世に伝へられた柳田先生」と述べている（胡桃沢 一九三〇。九四）。だが実際のところ、これを機に真澄は民俗学の体系化と裏腹に忘れられていく。真澄から離れていくことが民俗学の体系化と対応したのだと石井正己はいう。それは何故か。石井が指摘するのは、全国の同志を集めて共同研究するには、真澄のような天才の偉業は模範にならなかったのではないか、という点だ（石井 二〇〇六 七六）。

だが今一つ勘案しなければならないのは、当時の多様な郷土研究の勃興という事態であり、そこで繰り広げられた郷土をめぐる知の覇権での柳田のポジション⁽⁶⁾だ。たとえば長野県の郷土史家・栗岩英治の「柳田先生の放送を聞いての所感」という昭和七年の短文は、示唆的だ。

「時々信濃学術界、殊に郷土研究界には、一種の蜚語を耳にする。柳田派と地理派の対立だとか、誰れは古文書派で、誰れは民族学派だなどと申す蜚語である」（栗岩 一九三二 三五）という一節からは、当時の状況の一端が垣間見える。栗岩自身、こつした把握について「蜚語」「蜚語」とは言うものの、同じ文中で「当然文献的資料を最も尊重すべきものと断信する」と旗幟鮮明にしている以上、ある程度実情を反映したものとみなざるを得ない。柳田に近い立場にあつた有賀喜左衛門が昭和八年に「郷土研究に就いて」と題して、『信濃教育』に掲載した一文もその傍証となろう。有賀は「郷土研究といふ事の内容が、それを説く人々に依り相当違つてゐる」という現状を指摘したうえで、「郷土研究といふ言葉は大正の初めに発刊された『郷土研究』といふ雑誌に始まつたと、柳田が創刊した雑誌にその起源があることを示す。さらに「文

書以外に民間に伝承する事象を主として研究しようとした事に始まつたものである」と続ける（有賀 一九三三 三四）。ことさら柳田のオリジナリティを強調しなければならぬ状況が当時、あつたことが伝わつてこよう。郷土研究をめぐる複数の知が覇権を競い合う事態が、昭和初期の長野県で生じていた。

たとえば栗岩の一節にあつた「地理派」は、具体的にどのような郷土研究を展開していったのか。長野県で強い影響力を持ったのが、諏訪中学校に在職していた三沢勝衛の存在だった。明治一八年生まれの三沢は独自の地理学と地理教育学を打ち立て、『新地理教育論』『郷土地理の観方』といった著作の他、数多くの論文を残した⁽⁷⁾。大正九年に長野県立諏訪中学校教諭となつて以降、昭和一二年に五三歳で亡くなるまで、研究活動に加えて信濃教育会関連の講習会を通じて県内各地で指導するといったように、地理学の啓蒙普及活動に尽力したのが三沢だ。戦後、著作集がみず書房から刊行されたように、その影響は現在にまで及ぶ。

柳田が自らの学を経世済民の学と称したことは広く知られている。同様に三沢にとつての地理学も、社会的問題の解決に主眼が置かれていた。三沢は言う。「私の地理教育は、単に地理科のための地理教育ではない、「全社会の教化をもまで考慮し念願して居るのである」（三沢 一九五〇 六七）。地方農林業の活性化のためにはその風土性の研究が必須で、「その各地方の人々に対し、その郷土の持つ風土性への関心、進んではその調査・研究・認識等の覚醒は全く郷土地理教育を措いて他にそれを求めることは出来ない」と、その重要性を謳う（三沢 一九五〇 六八）。そのため「郷土地理の研究は特にその郷土人に俟つところの多い、否時にはその郷土人に依るのでなければ殆ど不可能でさへあるかと思はれる」と主張する（三沢 一九五〇 一五五）。郷土人によ

る研究を重視するその考えは、柳田と相通じるものであることは言うまでもない。

その手段として三沢がとった方法は、さまざまな地理学的調査を主に県内の教員層に依頼する、といったものだった。その結果、郷土地理に関心を寄せる者が、三沢を中心としたネットワークに組み込まれていくようになる。現在、諏訪中学校の後身である長野県諏訪清陵高校には三沢先生記念文庫が設置されており、その蔵書や受領した抜き刷りに加え、三沢が主に郵送で依頼した調査に対する報告資料も数多く保存されている。そうした報告一点一点を手にする、三沢の調査を通じていかに多くの人々が問題関心を共有していったかが伝わってくる。たとえば水内郡のとある小学校教員からの報告につけられた昭和四年の手紙の文面は、こういった具合だ。「新しい地理学の方向をお示し下さいましたことを厚く感謝いたします。ただばく然とした私に明かな方向をお示し下さいましたこと暗夜に燈明を得たこと、地がいたします。お話しくださいましたことを骨子として当地付近の地理学を多少なりとも考へてゆく事が出来るかと思へばたのしい」と、今後の指導を仰ぐ（三沢先生記念文庫所蔵・資料番号B c 38）。三沢が活躍した昭和初期、地理学を通して郷土を新たに振り返ろうとする教員たちの高揚感が、文面から如実に伝わってこよう。

講習会などを通じて不特定多数の聴衆を啓蒙し、さらに郵便という制度を駆使して県内各地の主に教員層とやり取りをしてネットワークを作り上げていく手法は、柳田のとったそれと同じだ。それだけに郷土研究をめぐる知の競合関係は避けられず、学問分野として相互に境界線を引く必要が生じていく。

後に『現代史学大系第七巻 民間伝承論』に概要が序文として掲載さ

れた「民間伝承論大意」の講演が行われたのは、まさにそうした時期だったのである。競合する他の学問分野との差異化を図るためのマネフェストを広く示す必然性が、この時期の柳田には確かにあった。そこでは「範囲即ち現在は何とあらうとも、結局民間伝承の研究が、他の学問と相對峙して、どこ迄を管轄し得るかといふ」ことが問われ、史学、神話学、宗教学、地理学、文化人類学、社会人類学などが言及対象とされる。史学については「記録文書の利用し得られる区域こそは、寧ろ甚だしく狭かったのである」と、改めてその限界を提示したうえで、民間伝承研究の重要性を謳う（柳田 一九九八d 一〇〇～一一二）。

柳田が自らの学を確立しその独自性を強く訴えかけていく過程は、しかしながら菅江真澄をそこから排除し、文献資料にあえて距離を置くことと表裏一体の関係をなすものだった。文献資料を活字化することによって作り上げられていく知のデータベースと、それがもたらすネットワークがはらむ可能性は、ここで見失われてしまうことになるのは当然の帰結であった。

柳田と信州を取り結ぶのに大きな役割を果たした胡桃沢勘内は、昭和一五年に享年五五歳で亡くなる。さらに昭和一八年には小池直太郎の死が続く。柳田と胡桃沢の指導、助言で始められた信濃教育会北安曇教育部会による『北安曇郡郷土誌稿』編纂事業が、当時進行していた。しかしそこで中心的役割を担い、戦後、信州地方史の重鎮となる一志茂樹が編集方針に反発し、後に柳田と袂を分かたつ。戦中から戦後にかけて、長野県では郷土研究をめぐる世代交代が一気に進み、柳田とゆかりの深い人々が退場していく。知を共有するためのデータベースを作成し、読者のネットワークを作り上げていくとした昭和初期の柳田の試みは、こうした事情もあって埋もれていった。

(1) 明治から大正にかけて柳田が文献資料の使用を積極的に進めてきたものの、大正末から昭和初年にかけて採集資料の重要性を強調したと永池健二も指摘している〔永池 一九七五 五九〕。

(2) この『信濃史料叢書第四』の「例言」には、「本書の出版に際して材料を供給せられ、編纂に関して多大の注意を与へられた」として謝辞が述べられている。そこで名指されているのはまず「東京帝国大学文科大学史料編纂官諸氏」であり、それに引き続いて「前内閣記録課長柳田国男氏」となっている〔信濃史料編纂会 一九一四 一〕。当時、多くの地域でなされていた史料の活字化にあたって、柳田がどのように関与していたかという点は、今後検討されるべき問題である。

(3) 「一将功なつて万骨枯る」という言葉で柳田民俗学を評する立場がある。それに対し鶴見太郎は「民間伝承の会」あての会員による書簡を通じて、知的探究心が個々の会員にかきたてられていた様子を読み取る。「一将功なつて」と一括することによって、そうした同時代の意気込み、喜びを埋没させるのではないかと、鶴見は危惧の念を表明する〔鶴見 二〇〇〇 二九三〕。そういった会員個々人の感懐だけではない。たとえば長野県在住の安間清宛の柳田からの書簡を見ると、その問題関心に応じて雑誌を送り、あるいは自らのカードの利用の便宜を図り、論文発表の場にも気配りする柳田の姿が浮かび上がってくる〔安間 一九八〇〕。アカデミズムの世界と全く縁のなかつた在野の人々に、学問的な好奇心を呼び起こさせ、さらに一人前の採集者に育て上げた点で柳田はたぐいまれな組織者であったという伊藤幹治の評価もあわせてここでは引用しておく〔伊藤 一九七五 三八〕。

(4) 『小谷口碑集』も含め、炉辺叢書はなぜ刊行されたのか。地方の人々の調査・採集の成果をも公にすることによって、その成果を共有財産とし、新たな学問体系の確立を図ろうとしたという松本三喜夫の指摘は重要だ〔松本 一九九四 二〇〇〕。柳田による知のデータベース作成の作業は、このように多方面からなされていたことになる。なお『小谷口碑集』については、花部英雄の論考も参照のこと〔花部 二〇〇七〕。

(5) なお先の『歴史地理』では地方会員からの問いに答える欄は、大正一〇年を最後に見られなくなる。その二年前には全国各地で繰り広げていた夏期講演会を中止している。地方会員とのネットワークを作り上げていくのに大きな役割を果たしていたこの二つが取りやめになったことは、会と機関誌の当初の性格が変化したことを示すものだ〔川合 二〇〇六 二四〕。『郷土研究』以降の柳田の取り組みは、それまで『歴史地理』を支えてきた地方在住者の一部の受け皿的役割を担ったといえるかもしれない。

(6) なお折口信夫は大正八年に東筑摩郡教育会東部支部の講習会に講師として招かれて以降、何度となく信州に足を運んでおり信濃教育会とのかかわりは深い。だがそこでの演題は大半が国文学に関するもので、信州では民間伝承の学の普及という点で距離を置いていた。この点については今井武志が作成した詳細な「折口信夫／信濃年譜」を参照されたい〔今井 一九七三〕。

(7) 本稿では三沢については詳述せず、別稿を用意したい。なお三沢についての概要は岡田俊裕〔岡田 一九九二〕、宮坂広作〔宮坂 一九九〇〕などがまとめたものである。

- 有賀喜左衛門 一九三三 「郷土研究に就いて」『信濃教育』三月号、信濃教育会
- 飯澤文夫 二〇〇〇 『内閣文庫』の世界 柳田国男と内閣文庫(二) 後藤総一郎編『柳田学前史 常民大学紀要1』岩田書院
- 石井正己 二〇〇六 「真澄と柳田国男(二) 『真澄遊覧記』刊行の実験」『菅江真澄資料センター 真澄研究』一〇号、秋田県立博物館
- 磯沼重治 一九九八 a 「菅江真澄」野村純一他編『柳田国男事典』勉誠出版
- 磯沼重治 一九九八 b 「菅江真澄研究史素描」磯沼重治編『菅江真澄研究の軌跡』岩田書院
- 伊藤純郎 二〇〇〇 「郷土読本・郷土学習帳・郷土誌学習帳 柳田国男と郷土教育」『伊那民俗研究』第九号、柳田国男記念伊那民俗学研究所
- 伊藤純郎 二〇〇四 『柳田国男と信州地方史 「白足袋史学」と「わらじ史学」』刀水書房
- 伊藤幹治 一九七五 『柳田国男 学問と視点』潮出版社
- 今井武志 一九七三 「折口信夫／信濃年譜」『折口信夫と信濃』信濃毎日新聞社
- 大月隆寛 一九九七 『顔あげて現場へ往け』青弓社
- 大月松二 一九四三 「小池先生の研究業績」『信濃教育』六月号、信濃教育会
- 岡田俊裕 一九九二 『近現代日本地理学思想史 個人史的研究』古今書院
- 川合一郎 二〇〇六 「明治・大正期における雑誌『歴史地理』」『歴史地理学』第四八巻第四号、歴史地理学会
- 喜田貞吉 一九一〇 「歴史地理学研究資料の供給に就て地方会員諸君に望む」『歴史地理』第一四巻第五号、日本歴史地理学会
- 栗岩英治 一九三二 「柳田先生の放送を聞いての所感」『信濃』第一巻第一号、信濃郷土研究会
- 胡桃沢勘内 一九三〇 a 「真澄遊覧記の機縁」『信濃教育』一月号、信濃教育会
- 胡桃沢勘内 一九三〇 b 「真澄遊覧記菴の春秋発見記」『旅と伝説』第三年第一号、三三元社
- 胡桃沢勘内 一九三〇 c 「真澄翁の跡を訪ねて」『旅と伝説』第三年第六号、三三元社
- 胡桃沢勘内 一九三〇 c 「鄙の一曲の覆刻」『旅と伝説』第三年第一号、三三元社
- 胡桃沢友男 二〇〇四 『柳田国男と信州』岩田書院
- 小池直太郎 一九二〇 「いもの泡」『信濃教育』六月号、信濃教育会
- 小池直太郎 一九二七 「案山子の話」『信濃教育』一二月号、信濃教育会
- 小池直太郎 一九三六 『一茶日記抄』(改訂増補五版) 信濃郷土誌刊行会
- 小堀光夫 二〇〇五 「伝説研究と菅江真澄 柳田国男『山島民潭集(二)』をめぐって」『口承文藝研究』第二八号、日本口承文藝学会
- 佐藤健二 二〇〇一 『歴史社会学の作法 戦後社会科学批判』岩波書店
- 佐藤卓己 二〇〇二 『キングの時代 国民大衆雑誌の公共性』岩波書店
- 信濃史料編纂会 一九一四 「例言」『信濃史料叢書第四』信濃史料編

纂会

- 高藤武馬 一九八三 『ことばの聖 柳田國男先生のこと』筑摩書房
 田中宣一 一九九三 『諸国叢書』と柳田國男『民俗学研究所紀要』
 一七、成城大学民俗学研究所
 鶴見太郎 二〇〇〇 『柳田國男と『民間伝承の会』』『東北学』Vol.2、
 東北芸術工科大学東北文化研究センター
 鶴見太郎 二〇〇五 『昭和戦前期における郷土研究の組織化 橋浦泰
 雄の人脈形成に見る』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五〇輯
 第四分冊、早稲田大学大学院文学研究科
 永池健二 一九七五 『柳田民俗学における山人研究史の変容と展開』
 『共同研究柳田國男の学問形成』白鯨社
 永池健二 一九九六 『柳田学の転回 大正から昭和へ』柳田國男研究
 会編『柳田國男・ジュネーブ以後』三一書房
 花部英雄 二〇〇七 『小池直太郎編『小谷口碑集』』『昔話伝説研究』
 第二七号、昔話伝説研究会
 福田アジオ 一九九二 『柳田國男の民俗学』吉川弘文館
 益田勝実 一九六五 『柳田國男の思想』『現代日本思想大系29 柳田國
 男』筑摩書房
 真鍋昌賢 二〇〇三 『経験としての『民俗芸術』 認識を構造化する
 仕掛けとしての『雑誌』』『日本思想史研究会会報』二二号、立命館大
 学日本思想史研究会
 松本三喜夫 一九九四 『柳田「民俗学」への底流 柳田國男と「炉辺
 叢書」の人々』青弓社
 三沢勝衛 一九五〇 『新地理教育論』古今書院
 宮坂広作 一九九〇 『風土の教育力 三沢勝衛の遺産に学ぶ』大明堂

- 安間 清 一九八〇 『柳田國男の手紙 ニソの杜民俗誌』大和書房
 柳田國男 一九七〇 『比較民俗学の問題』『定本柳田國男集第三〇巻』
 筑摩書房
 柳田國男 一九九八 a 『郷土叢書の話』『退読書歴』『柳田國男全集
 第七巻』筑摩書房
 柳田國男 一九九八 b 『菅江真澄』『柳田國男全集 第十二巻』筑摩
 書房
 柳田國男 一九九八 c 『木綿以前の事』『柳田國男全集 第九巻』筑
 摩書房
 柳田國男 一九九八 d 『民間伝承論』『柳田國男全集 第八巻』筑摩
 書房
 柳田國男 一九九九 『祭日考』『柳田國男全集 第十六巻』筑摩書房
 矢羽勝幸 一九九三 『一茶大事典』大修館書店
 和田敦彦 二〇〇二 『メディアの中の読者 読書論の現在』ひつじ書
 房

本稿作成にあたっては筑波大学の伊藤純郎氏に多々、ご教示いただいた。
 感謝申し上げて本稿の締めくくりとしたい。とはいえ本稿の至らぬ点の
 責は、すべて筆者にあることは言うまでもない。